

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



1

よろこびの知らせ
第1集

目 次

知恵を求める	1
列王記第一 3:5-15	
人生の意義	10
伝道者の書 1:1-11	
神殿を建てる	19
列王記第一 8:27-30	
ソロモンの晩年	28
列王記第一 11:1-8	

ここに収められたのは、2019年8月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれています。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

知恵を求める 列王記第一 3:5-15

3:5 その夜、ギブオンで主は夢のうちにソロモンに現われた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。」

3:6 ソロモンは言った。「あなたは、あなたのしもべ、私の父ダビデに大いなる恵みを施されました。それは、彼が誠実と正義と真心とをもって、あなたの御前を歩んだからです。あなたは、この大いなる恵みを彼のために取っておき、きょう、その王座に着く子を彼にお与えになりました。

3:7 わが神、主よ。今、あなたは私の父ダビデに代わって、このしもべを王とされました。しかし、私は小さい子どもで、出入りするすべを知りません。

3:8 そのうえ、しもべは、あなたの選んだあなたの民の中におります。しかも、彼らはあまりにも多くて、数えることも調べることもできないほど、おびただしい民です。

3:9 善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」

3:10 この願い事は主の御心にかなった。ソロモンがこのことを願ったからである。

3:11 神は彼に仰せられた。「あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、

3:12 今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、あなたのような者も起こらない。

3:13 そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。

3:14 また、あなたの父ダビデが歩んだように、あなたもわたしのおきてと命令を守って、わたしの道を歩むなら、あなたの日を長くしよう。」

3:15 ソロモンが目をさますと、なんと、それは夢であった。そこで、彼はエルサレムに行き、主の契約の箱の前に立って、全焼の

いけにえをささげ、和解のいけにえをささげ、すべての家来たちを招いて祝宴を開いた。

一、心の願い

フランスに「三つの願い」というお話があります。貧しいけれど仲良く暮らしていた夫婦に仙女が現われ、願いを三つかなえてあげようと告げました。おかみさんは、だんろの火を見つめながら言いました。「この火で肉をあぶって食べたら、きっとおいしいだろうね。今夜はひとつ、一メートルもあるソーセージでも食べてみたいもんだわ。」すると、願いが聞かれ、大きなソーセージがバタンと、天井から落ちてきました。

それを見て、主人がどなりました。「このまぬけ！ おまえの食いしんぼうのおかげで、だいじな願いごとを使ってしまったじゃないか。こんなもの、おまえの鼻にでもぶらさげておけ！」すると、ソーセージはおかみさんの鼻にくっついてしまいました。あわててひっぱってみましたが、どうしてもとれません。おかみさんは、大声で泣き出してしまいました。

それを見て、主人は言いました。「おまえのおかげで、だいじな願いごとをふたつもむだにしてしまった。最後はやっぱり、大金持ちにしてほしいとお願いしようじゃないか。」おかみさんは足をバタバタさせて言いました。「おだまり！ もうたくさんよ。最後の願いは、たったひとつ。どうぞ、このソーセージが鼻からとれますように。」そのとたん、ソーセージは鼻から離れ、おかみさ

んはもとの顔にもどりました。それから二人は、二度と不平を言わず、今の暮らしを大切にしたいということです。

これは貪欲を戒めたお話ですが、同時に、多くの人々が、はっきりとした願望や求めを持たないまま人生を過ごしていることを描いています。日々を平穩に生きることは決して悪いことではありません。しかし、人間にはそれ以上のものがあるのです。人は何のために生きるのかということを知って、はっきりした人生の目的、目標を持つこと、そしてそれを達成するために必要なものを求めることです。

ソロモンは、その王国を父ダビデから受け継ぎました。神は夢でソロモンに現われて、「わたしに願え、それに答えよう」と言われました。もし、あなたがソロモンだったら、何を求めたでしょうか。今、神が「わたしに願え」と言われたら、何を願うでしょうか。みなさんの心には、何か、ひたすらな願いが燃えていますか。そして、その願いは、神のみこころにかなっているでしょうか。

ソロモンの父ダビデは「わたしは一つの事を主に願った、わたしはそれを求める。わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを」（詩篇 27:4）と言いました。これは、もっと神を知りたい。神の愛や真実、その知恵や力を知って、神の心を自分の心としたい。神をほめたたえて日々を過ごしたいということを言っています。より真実なもの、より善なるもの、より美しいものを願い求めるのは、人

間だけができることです。そして神こそ、最高の真実、善、美です。それでダビデは何者にもまさって神ご自身を求めたのです。私たちもそのような願いを持つ者でありたいと思います。

二、願いと動機

神はソロモンに「あなたに何を与えようか。願え」と言われました。その時ソロモンは「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください」と答えました。ソロモンは、神に「知恵」を求めたのです。神はソロモンの願いを即座に受け入れてくださいました。ソロモンが正しい動機でそれを求めたからです。

ソロモンは、長生きすることや金持ちになること、また人々から誉められることを願うこともできたでしょう。しかし、ソロモンは、自分のためではなく、国のために役立つことを願いました。国を正しく治め、国民を幸せにすることを願ったのです。今日、世界の指導者たちが、ソロモンと同じように、自分のためではなく、国民のためになることを願ってくれたら、どんなにいいだろうかと思います。

聖書は言っています。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。」（ヤコブ 4:2-3）聖書は、願うのなら、神に願えと教えています。神こそ、あらゆる善いものの与え主だからです。神は、私たちがしつこく願うか

ら、しょうがないので与えるというお方ではありません。神は、私たちのために最善のものをすでに用意してくださっていて、私たちがそれを願うのを待っていてくださるのです。ちょうど父親が、あらかじめバースデー・ギフトを買っておいて、子どもが願ったらすぐにそれをあげようと待ち構えているのと同じです。

しかし、神は、自分の快樂のために願うことや悪い動機で願うことまで聞き入れてはくさいません。私の友人の牧師は、ラスベガスに行く人から、「先生、ギャンブルで勝って帰れるように祈ってください」と言われて、たいへん困ったと話してくれました。その牧師は「私たちの神さまと幸運の女神とは違うんですよ」と話し、その人がギャンブルにのめり込まないように祈ったそうです。その人はラスベガスで負けて帰ってきましたが、あとになって、「あの時自分の願いが叶わなくてよかった」とその牧師に話したということでした。

ソロモンは自分のためには何一つ求めず、国民のためになることを求めました。それで神はソロモンが求めなかった富も誉れもソロモンにお与えになりました。11～13節にこう書かれています。「あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、

あなたのような者も起こらない。そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。」

私たちが良い動機で、み心にかなったものを求めるとき、神は、それに添えて、あらゆる良いものも与えてくださるのです。イエスはこう言っておられます。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」（マタイ 6:33）ここに集まる私たちはそれぞれに生まれた国は違います。みなアメリカに住んでいますが、アメリカの国籍を持つ人も持たない人もあるでしょう。しかし、キリストを信じる者は、みなひとつの国民、「神の国」の民です。同じ天に国籍を持つ者です。ソロモンがイスラエルの王国を第一にして、そのために知恵を求めたように、キリストを信じる者も神の国を第一にし、神の国のために生きることを願う時、神は、神の国の栄光と力で私たちを満たしてくださるばかりか、私たちの生活や、仕事、勉強に必要なものもすべて満たしてくださるのです。

三、知恵を求める

願いを持つことの大切さと、それを正しい動機で願うことについてお話してきましたが、最後に「知恵を求める」ことについてお話ししましょう。神の国の働きには知恵が必要です。神は知恵によって世界を造り、治めておられます。救い主には「知恵と悟りの霊」がとどまる

とイザヤ 11:2 には預言されています。この預言の通り、イエスはその知恵によって人々を教えました。イエスの教えを聞いた人々はその知恵に驚いています。南の女王がソロモンの知恵を聞くためにやってきましたが、イエスはソロモンに勝る知恵によって語られたと聖書にあります（マタイ 13:54、ルカ 11:31）。最初の教会の役員は「御霊と知恵とに満ちた」人たちの中から選ばれました。「知恵」は九つの聖霊の賜物のトップに挙げられています（コリント第一 12:7-10）。

また知恵は人生のために必要です。より良く働くための知恵だけでなく、より良く生きるための知恵も持っていないければならないのです。国会議員、政府の高官や大学の教授など、地位のある人が、つまらないことを言ったり、したりして、その地位を棒にふるってしまうことがよくあります。そうした人は、仕事の上では知恵があり、能力があるのに、人生をより確かに、より良く生きるための知恵を学んでいなかったのです。

私たちも、神からの知恵をいただかなければ、愚かなことを言ったりしたりして、自分自身を卑しめたり、他の人を傷つけたりしてしまいます。けれども知恵ある人は、それによって人々を癒やすことができます。聖書に「軽率に話して人を剣で刺すような者がいる。しかし知恵のある人の舌は人をいやす」（箴言 12:18）とあつ通りです。

現代は、インターネットのおかげで様々な知識が簡単に手に入るようになりました。コンピュータのキーボー

ドを叩くだけで、また、スマート・フォンに触れるだけで、いろいろなことを調べることができます。しかし、コンピュータやスマートフォンは、そうした知識のどれを選び、それをどう用いるかまでは教えてくれません。

「知恵」と「知識」とは違います。「知恵」は「知識」の上であって、「知識」を整理し、判断するものです。ソロモンが「善悪を判断する心」を求めたように、洪水のようにやってくる情報の中から善いものを選び取る「知恵」が、現代ではもっと必要になりました。

ラインホルド・ニーバーは有名な“Serenity Prayer”を残しました。

O God, give us
serenity to accept what cannot be changed,
courage to change what should be changed,
and wisdom to distinguish the one from the other.

神よ、私たちに与えてください。

変えることのできないものを受け入れる冷静さを。

変えなければならぬものを変える勇気を。

そして、一方を他方から区別する知恵を。

人生においても、このように、ものごとを判断する「知恵」が必要なのです。

このような知恵を求めましょう。仕事が良くできるという知恵だけでなく、人生を正しく、また、満たされて生きる知恵を求めましょう。そのような知恵を、子どもたちに、若い人たちに与えてあげたいと思います。聖書は「知恵を得ることは、黄金を得るよりはるかにまさる。

悟りを得ることは銀を得るよりも望ましい」(箴言 16:16) と言っています。

金や銀にまさる知恵、それは、すべての知恵の源である神から来ます。また、神の言葉から来ます。テモテ第二 3:15 に「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです」とあります。

ヤコブ 1:5 はこう言っています。「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」私たちはみな知恵に欠けています。しかし、がっかりすることはありません。神の約束を信じ、神に祈り求めましょう。神は与えてくださいます。神の知恵に導かれ、人を生かし、自分を生かし、神に喜んでいただける人生を送りたいと思います。

(祈り)

すべての知恵の源である父なる神さま。私たちは、「知恵の欠けた者」です。あなたから与えられた人生を、愚かなことのために使い、感謝も、喜びも、満足もないままに過ごしてきました。しかし、あなたは、そんな私たちをイエス・キリストによって救いにいたる知恵を与えてくださいました。この知恵をさらに求めさせてください。私たちがもっと聖書に親しみ、あなたからの知恵にさらに満たされることができますよう、助け、導いてください。私たちの救い主イエス・キリストのお名前前で祈ります。

人生の意義

伝道者の書 1:1-11

- 1:1 エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば。
1:2 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。
1:3 日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。
1:4 一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。
1:5 日は上り、日は沈み、またもとの上る所に帰って行く。
1:6 風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。
1:7 川はみな海に流れ込むが、海は満ちることがない。川は流れ込む所に、また流れる。
1:8 すべての事はものうい。人は語ることさえできない。目は見て飽きることもなく、耳は聞いて満ち足りることもない。
1:9 昔あったものは、これからもあり、昔起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。
1:10 「これを見よ。これは新しい。」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあつたものだ。
1:11 先にあつたことは記憶に残っていない。これから後に起こることも、それから後の時代の人々には記憶されないであろう。

一、ソロモンの知恵

ソロモンは神に知恵を求めました。神はそれを喜び、誰も及ばないような知恵を彼に与えました。列王記第一 3:16-28 には、ソロモンの知恵を示すエピソードが記されています。ひとりの女性がもうひとりの女性と一っしょに暮らしていました。彼女が赤ん坊を産んでから三日して、もうひとりの女性も赤ん坊を産みました。ところが、その赤ん坊が死んでしまいました。もうひとりの女性は、自分の死んだ赤ん坊と、生きている赤ん坊とを取り替えて、生きている赤ん坊は自分の赤ん坊だと言い張ったの

です。そこで生きている赤ん坊の母親が訴えを起こしました。この訴えはソロモン王が直々に裁くことになりました。

ソロモンは剣を持って来させ、「生きている子どもを二つに断ち切り、半分をこちらに、半分をそちらに与えなさい」と言いました。すると、ほんとうの母親は子どもが死んでしまうことに耐えられなくなり、「どうか、その生きている子をあの女にあげてください」と願い出ました。ソロモンは、その言葉を聞いて彼女に赤ん坊を返しました。

これと同じ話は、大岡越前のお話しにもあります。大岡越前は、ひとりの子どもを巡って、私こそこの子の母親だと主張するふたりの母親に、子どもの右手と左手を引っ張らせ、自分の方に引っ張ったほうに子どもを与えろと言いました。最初、ふたりは子どもの手を引っ張りあうのですが、子どもが痛がるのを見た、本当の母親は思わず子どもの手を離してしまいます。それを見た大岡越前は、手を離れた母親に子どもを与えました。いわゆる「大岡裁き」のひとつですが、これは聖書から伝えられてきたものだと言われています。

ソロモンの知恵は、その時代のどの賢者たちの知恵に勝っていて、それはまわりの国々に評判となって聞こえたほどでした。ソロモンの評判を聞いたシェバ（アラビア）の女王がソロモンを試すためにやってきました。彼女の質問に対してソロモンが答えられなかったものは何一つありませんでした。それで、シェバの女王は言いま

した。「私が国でああなたの事績とあなたの知恵とについて聞き及んでおりましたことはほんとうでした。実は、私は、自分で来て、自分の目で見るとまでは、そのことを信じなかったのですが、驚いたことに、私にはその半分も知らされていなかったのです。あなたの知恵と繁栄は、私が聞いていたうわさよりはるかにまさっています。」
(列王記 10:6-7)

ソロモンは「三千の箴言」を語り、「一千五首の歌」を詠みました。(列王記第一 4:32) ソロモンの格言は「箴言」に、彼の歌は「雅歌」に遺されています。「伝道者の書」もソロモンが書いたとされてきましたので、箴言と雅歌の間に置かれていますが、マルティン・ルター以降、多くの聖書学者は、様々な観点から、これは、ずっと後代、イスラエルがバビロンの捕囚から帰ってきてから後の時代に書かれたものだと言っています。

しかし、「伝道者の書」がソロモンが書いたものでなくても、ここには、ソロモンが遺した知恵の伝統が生きています。人生の現実を見つめる目があります。そこから発見した人生の知恵があります。ソロモンがこう言ったであろうという言葉がここにはあるのです。そんな意味で、「ソロモンの知恵」に関連して「伝道者の書」を学ぶことにしましょう。

二、人生の空しさ

伝道者の書というと誰もが思い浮かべるのは2節の「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空」という言葉でしょう。ヘブライ語では次のようになります。

הַבַּל הַבָּלִים	ヘベル ハバリーム	空の空
אָמַר קְהֵלָה	アマル コヘーレット	伝道者は言う
הַבַּל הַבָּלִים	ヘベル ハバリーム	空の空
הַבַּל הַבָּל	ハコール ハベル	すべては空

「空の空」は「ヘベル ハバリム」で、最初の「ヘベル」（空）は単数形で、次の「ハバリム」は複数形です。英語では“Vanity of vanities”となり、これは、最上級を表します。「最も空しい。これ以上に空しいものはない」という意味になります。

では、伝道者はいったい何が空しいと言っているのでしょうか。最初は知恵と知識です。人がどんなに知恵や知識を得たところで、それによって見えてくるのは、混乱した世界と、はかなく消えていく人生でしかないのです。18節に「実に、知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識を増す者は悲しみを増す」とある通りです。ほんとうにそうですね。

それなら、本能のままに快樂に浸って生きればいいのでしょうか。2:1-2に「私は心の中で言った。『さあ、快樂を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。』しかし、これもまた、なんとむなしいことか。笑いか。ばからしいことだ。快樂か。それがいったい何になろう」とあるように、それもまた空しいと言っています。これもまたほんとうにそうです。

では財産はどうでしょうか。様々な事業を達成することはどうでしょうか。それらは後の世代にまで引き継がれ、意義あるものではないでしょうか。しかし、伝道者は言います。「私は日の下で骨折ったいっさいの労苦を

思い返して絶望した。どんなに人が知恵と知識と才能をもって労苦しても、何の労苦もしなかった者に、自分の分け前を譲らなければならない。これもまた、むなしく、非常に悪いことだ。」(2:20-21)

このあと、伝道者は、社会のさまざまな矛盾を突きます。「私は再び、日の下で行なわれるいっさいのしいたげを見た。見よ、しいたげられている者の涙を。彼らには慰める者がいない。しいたげる者が権力をふるう。しかし、彼らには慰める者がいない。」(4:1)「悪い行ないに対する宣告がすぐ下されないので、人の子らの心は悪を行なう思いで満ちている。罪人が、百度悪事を犯しても、長生きしている。」(8:11-12) こうしたことは、現代のどこの国にも見られる現実です。

伝道者は言います。「人生は不条理で、無意味で、結局すべてが過ぎ去っていく。また、人は明日何が起こるか分からない。それに、誰もが死を迎えなければならない」と、繰り返し語っています。伝道者の書を読んでいると、悲観的になります。けれども、そこには、そうしたはかない人生だからこそ、「今を大切にし、身近な人々を大切にし、大きな望みを抱かず、何事もほどほどにきなさい」という、処世訓があります。そうした人生訓、処世訓、また、金言といわれるものには、耳を傾ける価値がありますが、そうしたものでさえも、人生から空しさを取り除くことはできません。人の心にひそんでいく虚無感は、そうしたものでは癒やされることはなく、人はありきたりの人生訓、処世訓では満足できないので

す。処世訓が「ああしなさい。こうしなさい」ということ以上の、もっと根本的な解決が必要なのです。伝道者の書は、人生訓、処世訓以上のことを語っています。

三、人生の意義

いきなり、伝道者の書の最後の章に飛びますが、伝道者は12章で結論を語っています。「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」(12:1) 伝道者はさんざん「空の空。すべては実体の無いもの。過ぎ去って行くもの」と語ってきましたが、ここで、過ぎ去ることのないお方、私たちに存在と実体を与えておられる創造者を指し示しています。「あなたの創造者を覚えよ。」「覚える」というのは、まずは「知る」ということを意味します。世界を造り、私たちを造った神を認め、知るということです。また「覚える」というのには、「神を人生に、また生活の中心に据える」という意味もあります。神が私たちを造ったのなら、私たちの人生の意味も目的も神にあるはずです。神を自分の人生に迎え、神から人生の意義を受け取るのです。

「創造者を覚える」ということが、13節では「神を恐れる」という言葉で言い換えられています。こう書かれています。「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」

神を知り、神を恐れる。とてもシンプルです。哲学は難しい理論で人生の意義を語ります。様々な宗教は、人生の意義は特別な修練を経て悟るもので、簡単に得られ

るものではないと言います。しかし、聖書は違います。誰でも、神を、自分の創造者として受け入れ、敬うなら、人生の意義を得ることができると言います。ソロモンが「主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ」（箴言 1:7）と言っているように、主を恐れることが究極の知恵、知識なのです。

1897年から1898年にかけて、フランスの画家ポール・ゴーギャンはタヒチで幅374.6 cm（147.5 in）、高さ139.1 cm、高さ（54.8 in）のキャンバスに一枚の油絵を書きました。向かって右側に赤ん坊が描かれ、中央に若者の姿が描かれ、左側に老人が描かれています。ゴーギャンは、この絵に「我々はどこから来たのか？ 我々は何者か？ 我々はどこへ行くのか？」と疑問形で書きました。これは、ゴーギャンの心からの問いで、誰もが心の深いところで持っている問いであると思います。

「我々はどこから来たのか？」東洋人は、「父母から来た。先祖から来た」と考え、両親を敬い、祖先を崇拝します。よく、小さな子どもが母親に、「私はお母さんから生まれたんでしょ。じゃあ、お母さんは誰から生まれたの？」と訊きます。母親は「おばあちゃんから生まれたのよ」と答えます。「じゃあ、おばあちゃんは誰から生まれたの？」「おばあちゃんのおかあさんよ。」

「おばあちゃんのおかあさんは？」「おばあちゃんのおかあさんのおかあさんよ。」「おばあちゃんのおかあさんのおかあさんは？」…この質問と答はいつまでたっても終わりません。しかし、聖書は、人類の出発点を教え

ています。ルカ 3:23-38 にイエスの系図があり、ヨセフからマタテ、マタテからレビ、レビからメルキへと先祖に向かって遡っています。その中には、ダビデもアブラハムもあり、アダムにまで行き着くのですが、「このアダムは神の子である」（ルカ 3:38）とあります。これは、神によって直接造られたという意味で、別の訳では「そして神に至る」となっています。すべての人は「神に至る」のです。私たちは皆、神から来たのです。

私は、若いころ、漠然とではありましたが、「自分は何のために生きているんだろう」という疑問をいつも心に抱いていました。その答えを求めて聖書を読みました。詩篇に「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです」（詩篇 139:13）という言葉を見つけたとき、その答えを得たような気がしました。神が私を造ってくださった。そうであるなら、私の人生の目的や意義は神にあるのだということが分かったのです。

私は、自分が神に造られ、生かされ、愛されている存在であることを知りませんでした。もし、神を知らないままであったなら、「主を恐れる」という本当の知恵を持たず、きっと愚かなことをしてきたに違いありません。たとえ賢くこの世を渡り歩くことができたとしても、心はいつも空しいままだったでしょう。満たされない思いを持ちながら、目的のない人生を送っていたことでしょう。

「我々はどこから来たのか？」この問いの答えを見つけることができたなら、「我々は何者か？」「我々はどこへ行くのか？」という問いにも答えを見つけることができます。私たちは神に愛されている者です。神から来たのだから、神に帰るのです。世を去って神に帰る前に、神を認めない空しい人生から回れ右をして神に立ち返りましょう。聖書は、イエス・キリストを「いっさいのものをいっさいのものによって満たす」（エペソ 1:23）お方と呼んでいます。このイエス・キリストが、私たちを「空の空」という人生から「満ち足りた人生」へと導いてくださるのです。「救いに至る知恵」を聖書から学びましょう。そして、それを実践する喜びへと導かれていきましょう。

（祈り）

私たちが造られた神さま。私たちの人生の意義は、創造者であるあなたを知ることにあります。どうぞ、私たちに、あなたを知る知識、あなたを恐れる知恵を与えてください。そして、空しさにかえて、常に、平安と、喜びと、希望で私たちを満たしてください。主イエスのお名前で祈ります。

神殿を建てる 列王記第一 8:27-30

8:27 それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。

8:28 けれども、あなたのしもべの祈りと願いに御顔を向けてください。私の神、主よ。あなたのしもべが、きょう、御前にささげる叫びと祈りを聞いてください。

8:29 そして、この宮、すなわち、あなたが『わたしの名をそこに置く。』と仰せられたこの所に、夜も昼も御目を開いていてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。

8:30 あなたのしもべとあなたの民イスラエルが、この所に向かってささげる願いを聞いてください。あなたご自身が、あなたのお住まいになる所、天にいまして、これを聞いてください。聞いて、お赦してください。

一、神殿の歴史

ソロモンの業績で最も知られているのは神殿を建てたことでしょう。ソロモンが神殿を建てたといっても、それまで神殿がなかったわけではありません。神殿はイスラエルの国が始まったときからありました。つまり、エジプトで奴隷だったユダヤの人々が神によって救い出され、イスラエルという国が始まった時、神が最初にするように命じられたのは、神殿を建てることでした。

今、「イスラエルという国が始まった」と言いましたが、この国は、最初、領土を持たない国、王もない国でした。人の目からみれば難民の一団にすぎませんでした。しかし、彼らの王は、神ご自身で、その国は神が与えた法律、「律法」によって治められる国でした。そし

て、人々はやがて受け継ぐ領土に向かって旅をしていました。それで神殿も人々と共に移動できるように折りたたんだり、組み立てたりできるものになっていました。それはテント式のもので、「幕屋」と呼ばれました。

イスラエルが荒野を旅する時はいつも幕屋が先頭に立ちました（出エジプト 40:36）。イスラエルが宿営するときには、幕屋も建てられ、幕屋で奉仕するレビ族が幕屋の近くに控えました。ゲルシヨンの氏族は西側に、ケハテの氏族は南側に、メラリの氏族は北側に、そして、モーセとアロン、祭司のグループは東側、つまり、幕屋の正面に宿営しました（民数記 3:23-38）。イスラエルの各部族は幕屋を中心にしてテントを張りました。こうしたことは、神が常にイスラエルと共にいてくださって彼らの神となり、イスラエルが神の民とされていることを目に見える形で表すものでした。幕屋は神の臨在のしるしでした。

荒野の旅を終えたイスラエルは約束の地を手に入れましたが、たえずまわりの民族から脅かされ、平和な時はあまりありませんでした。しかし、神はダビデを選び、ダビデによってイスラエルを外敵から守り、国家の基礎を整えてくださいました。ダビデは自分のために王の家、宮殿を建てましたが、神の家がいまだにテントづくりのままであることに心を痛め、立派な神殿を建てたいと願いました。けれども、それはダビデには許されませんでした。神は、ダビデの子が王位を継ぎ、その子が神殿を建てると約束されました（歴代誌第一 17章）。その

約束のとおり、ダビデの子ソロモンがダビデに代わって、壮麗な神殿を建てたのです。

そして、いよいよ契約の箱が神殿に運び込まれる日となりました。契約の箱が至聖所に運び込まれると、雲が神殿を覆いました。雲は神の栄光を示すもので、これは神がこの神殿を喜び、受け入れてくださったことを示しています。聖書は「主の栄光が主の宮に満ちた」（列王記第一 8:11）と言っています。

二、神殿の意義

その時、ソロモンはイスラエルを代表して祈りを捧げました。きょうの箇所は、その祈りの一部です。ソロモンの祈りから、私たちは、神殿が神の民にとってどんな意義を持っていたかを知ることができます。

ソロモンはまず第一に、神が神殿をこえて偉大なお方であると言いました。27節にこうあります。「それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。」ソロモンが建てた神殿は「神の家」、「神の住まい」と呼ばれますが、実際には、そこに神をお入れできたわけではありません。たとえそれがどんなに大きく、立派な建物であっても、神をお入れできるような建物は地上のどこにもありません。神は全地に満ちておられるお方であって、偶像の神々のようにどこかの神殿やほこらにこじんまりと座っておいでなるという方ではないのです。

ソロモンの時代からずっと後に預言者イザヤは幻を見、こう記しました。「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、互いにこう呼び交わしていた。『聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。』」（イザヤ 6:1-3）この幻では、神殿は、神の衣の裾の一部をお入れすることしかできないでいます。神は神殿をこえてはるかに偉大なお方であることが、幻の中で描かれています。

そして、セラフィムは、こう叫びました。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」「聖なる、聖なる、聖なる」と三度繰り返されるのには意味があります。神殿の本体は「聖所」（ホーリー）と呼ばれました。その聖所の奥まったところは「至聖所」（ホーリー・ホーリー）と呼ばれ、契約の箱はここに安置され、そこは地上で最も聖なる場所でした。ところがセラフィムは「ホーリー・ホーリー」にさらに「ホーリー」を加えて、神を「ホーリー・ホーリー・ホーリー」と呼んでいます。神は聖所や至聖所でさえもお入れすることができないほどの、最高に聖なるお方であると言っているのです。

聖書は、このように偉大な神を教えています。イスラエルの回りの国々は、自分たちの地域だけを治める小さな神々しか知りませんでした。ですから、イスラエルと戦争して負けた時、「彼らの神々は山の神です。だか

ら、彼らは私たちより強いのです。しかしながら、私たちが平地で彼らと戦うなら、私たちのほうがきっと彼らより強いでしょう」（列王記第一 20:23）などと言って、自分たちの概念でまことの神を押し量り、神の偉大さやその栄光を認めなかったのです。

J. B. Phillips といえば、聖書を現代英語で訳した人として有名ですが、彼は『あなたの神は小さすぎる』という本も書いています。1953年に英国で出版されたもので、私は若い頃、それを読んで、とても刺激を受けました。まことの神を知る英国の人たちでさえ、自分たちの常識や伝統だけで神を小さく見積もっているとしたら、「八百万の神々」しか知らなかった日本人は、聖書に触れても、クリスチャンになってからでも、神を自分の小さな考えの中に閉じ込めてしまうことがあるのではないかと、反省させられました。

しかし、ソロモンは、神の偉大な栄光を知っていました。ですから、「実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです」と言って、自分が神殿を建てたことを誇ることなく、いっさいの栄光を神にお返ししています。神の栄光を知る神の民は、常にそのようでありたいと思います。

では、神殿が神をお入れすることができないのなら、神殿には意味がないのでしょうか。いいえ、もしそうなら、神は神殿を造らせなかったでしょう。神は人間から遠く離れて、人間と何の関わりも持たないお方ではありません。哲学者たちは一応は神の存在を認めます。しか

し、神は、世界を精巧な機械のようなものとして造り、その動力スイッチを入れたあとは、世界がおのずと動くのにかかせ、ご自分は世界から手を引いておられると、彼らは言うのです。そして、彼らは神を定義して、「神とは何のものにも動かされないが、すべてのものを動かすお方である」だと言います。もし世界のすべてがすでにプログラムされ、神が世界から手を引いておられるなら、私たちが神に祈ったところで神は何もなさらないということになります。けれどもそれは「哲学者の神」でしかなく、私たちが聖書の中に見る、生ける、まことの、あわれみ深い父なる神ではありません。生ける、まことの、あわれみ深い父なる神は、私たちの世界に深くかかわり、私たちの祈りを聞いて、世界を動かし、導いてくださるお方なのです。神殿は、天におられる神が、私たちの祈りを確かに聞いてくださっているということの「しるし」として建てられたのです。

ソロモンは言っています。「あなたのしもべとあなたの民イスラエルが、この場所に向かってささげる願いを聞いてください。あなたご自身が、あなたの御住まいの場所、天においてこれを聞いてください。聞いて、お赦してください。」（30節）神殿は、人々の祈りを仲介する場所です。人々の祈りが直接天に向かうのではなく、神殿を介して、神に届くのです。

神殿は「祈りの家」です。そこでは日夜祈りが捧げられています。たとえ、神殿に来ることができなくても、外国に囚われの身となっても、自分のいる場所で祈り、神殿での祈りに加わるなら、神はそれに答えてくだ

さいます。神殿に置かれた主の御名を覚えて祈るなら、神はその祈りに聞いてくださるのです。さらに、祈りが聞かれるという恵みは、イスラエルの人々だけでなく、主を信じる外国人にも与えられます。イザヤ 56:7はこのことをもっとはっきりと語っています。「わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽ませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ。」

神は、私たちの祈りを聞くために、人の住む、この地上にその身を乗り出してくださっています。その場所が神殿なのです。神殿は、神の耳が置かれた場所と言ってよいかもしれません。神は神殿を与えることによって、神の民に、神が祈りを聞いてくださるお方であることを示し、人々は神殿を持つことによって、祈りが聞かれるという確信を与えられたのです。

三、今日の神殿

ソロモンの建てた神殿は紀元前 586 年、バビロニアによって破壊されました。バビロニアが滅び、ペルシャの時代になり、紀元前 515 年に人々は神殿を再建しましたが、それはソロモンの建てた神殿からみればかなり見劣りのするものでした。それでユダヤの王となったヘロデはユダヤ人の人気をとるために改修工事をし、それはヘロデの死後も続けられました。しかし、改修工事が完成しないうちに、神殿は紀元 70 年、ローマ軍によってことごとく滅ぼされてしまいました。それ以来、神殿は再建

されることがなく、今は神殿の外壁の一部が「嘆きの壁」としてエルサレムに残っているだけです。

それから二千年たとうしている今日も神殿が再建されないているのには理由があります。それは、神殿はその役割を終えたからです。神殿は、幕屋の時代から、神が人と共におられることのしるしでした。しかし「インマヌエル」（神共にいます）と呼ばれる主イエスが、人となって人と共に住まわれた時、神殿は要らなくなったのです。主イエスご自身が「幕屋」となり「神殿」となれたからです。ヨハネ 1:14 に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」とありますが、「住まわれた」と訳されている言葉には「幕屋を張る」という意味があるのです。そしてイエスご自身が「幕屋」であり、「神殿」なのです（ヨハネ 2:19-21）。

またイエスは、弟子たちに「わたしの名によって求めなさい」と言われました（ヨハネ 16:23-26）。神殿は主の御名が置かれた場所でしたが、今は、私たちには「イエス御名」があります。いつでも、どこでも「イエスの御名」によって祈るなら、その祈りを聞いていただけるのです。これは、新約の時代の大きな恵みです。

そして、キリストご自身が神殿であるなら、キリストのからだである教会もまた神殿です。教会は「神の宮」であると、聖書は言っています。今は、詳しくお話するいとまがないので、聖句だけをあげておきます。「神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。『わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神とな

り、彼らはわたしの民となる。』」（コリント第二 6:16）「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」（コリント第一 6:19）「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」（ペテロ第一 2:5）

教会は、信仰者たちが共に心を合わせて祈ることによって、「祈りの家」として建て上げられていきます。「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」とあるように、ここで、どの国の人も共に心を合わせて祈る「祈りの家」が建てられ、成長するよう願い求めましょう。ソロモンの神殿に「栄光が満ちた」ように、私たちも主の栄光に満たされ、主の栄光を表す、神の家とされていきましょう。

（祈り）

主なる神さま、あなたはイエス・キリストを予告するものとして、また教会の雛形となるように、旧約時代に神殿を地上に置いてくださいました。どうぞ、私たちも、教会を「祈りの家」として聖別していくことによって、神殿が果たした役割を引き継ぐことができるよう助けてください。私たちも、生ける石となって主の宮を建てることのできるよう導いてください。主イエス・キリストのお名前です。

ソロモンの晩年

列王記第一 11:1-8

11:1 ソロモン王は、パロの娘のほかにも多くの外国の女、すなわちモアブ人の女、アモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヘテ人の女を愛した。

11:2 この女たちは、主がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中には行ってはならない。彼らをもあなたがたの中に入れてはならない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる。」と言われたその国々の者であった。それなのに、ソロモンは彼女たちを愛して、離れなかった。

11:3 彼には七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがあった。その妻たちが彼の心を転じた。

11:4 ソロモンが年をとったとき、その妻たちが彼の心をほかの神々のほうへ向けたので、彼の心は、父ダビデの心とは違って、彼の神、主と全く一つにはなっていなかった。

11:5 ソロモンはシドン人の神アシュタロテと、アモン人のあの忌むべきミルコムに従った。

11:6 こうしてソロモンは、主の目の前に悪を行ない、父ダビデのようには、主に従い通さなかった。

11:7 当時、ソロモンは、モアブの、忌むべきケモシュと、アモン人の、忌むべきモレクのために、エルサレムの東にある山の上に高き所を築いた。

11:8 彼は外国人の自分のすべての妻のためにも、同じようなことをしたので、彼女たちは自分たちの神々に香をたき、いけにえをささげた。

一、人生の結末

ジョージ・イーストマンといえば、イーストマン・コダック社を起こした人で、彼は念願通り、巨額の富を手に入れました。しかし、彼は「私の仕事は終わった。なぜ待つのだ」というメモを残し、拳銃で頭を撃ち抜きました。マリリン・モンローがネブトールという薬を大量に

飲んで死んだ時の新聞には、「一週間に一万ドルの収入があっても、彼女は平安を買うことができなかった」という、編集者のコメントが載りました。アーネスト・ヘミングウェイはノーベル文学賞を受けたアメリカの代表的な作家でしたが、ショットガンで自殺しました。あれだけの才能も成功も、彼の心を満たすことはなかったのです。

FMラジオを発明したエドウィン・アームストロング、自動車デザイナーのアーサー・シヴォレー、ワイオミング州知事レスター・ハントなど、みな成功者たちでした。しかし、その人生は、悲しいことに、自殺で終わっています。

世界的な金融会社を起こしたチャールズ・シュワープは会社を倒産させ、死ぬまでの五年間、借金で生活していました。全米最大の鉄鋼会社社長のサムエル・インスル、世界最大の設備会社社長のリチャード・ウィットニー、ニューヨーク証券取引所会頭アルバート・ホールらも失意のうちに死んでいます。

こうした人々はその事業や業績において成功者だったのに、人生においてはそうではなかったのです。人生のしめくくりの時につまづいてしまいました。それまで良い人生を送ってきた人であればあるほど、その晩年が惨めなのは、実に、残念なことです。

ソロモンは、その知恵が当時の世界に響き渡ったほどの賢い王でした。知恵、知識だけでなく、財力においても、軍事力においても、父ダビデを凌ぐものを持ってい

ました。ソロモンは主なる神への信仰を持ち、主のために立派な神殿を建て、それを捧げました。ソロモンが神殿を捧げた時の祈りは、今日も、教会堂が捧げられる時に使われるほどです。ソロモンは生涯王の地位に留まり、長寿を全うし、その子に王国を譲りました。表面的には、その晩年に問題はなかったように見えます。しかし、信仰の面では、そうではありませんでした。聖書は「ソロモンが年をとったとき、…彼の心は、父ダビデの心とは違って、彼の神、主と全く一つにはなっていなかった」（列王記第一 11:4）と書いています。そして、その結果、ソロモンの子レハブアムの時代にイスラエルは南北に分裂し、国は弱く、貧しくなり、まわりの国々から圧迫され、ついには外国に滅ぼされてしまいました。ソロモンは、人生の締めくくりのときに失敗をし、その失敗のツケを次の世代に残してしまったのです。

二、家庭と信仰

ソロモンが晩年に道を誤ったのはなぜだったのでしょうか。聖書はその「妻たち」のゆえであったと言っています。「ソロモンが年をとったとき、その妻たちが彼の心をほかの神々のほうへ向けた」（4節）とあります。ソロモンには七百人の妻と三百人のそばめを持っていました。そしてその多くは外国から来た女性たちでした。これはいわゆる「政略結婚」というもので、当時ほどこの国でも、諸国の王たちの娘と形だけの結婚をし、実際には人質にするということが行われていました。ソロモンは強大な軍隊を持っていましたが、実際にはほとんど戦

争をしておらず、外交によって諸国と友好関係を結んだのです。

しかし、いくら平和のためとはいえ、結婚を政略のために使うのは、決して神の喜ばれることではありません。結婚は人類が子孫をのこし、社会を形成するために便宜上作りだした制度ではありません。それは、神ご自身が創造の初めに定められたものです。聖書には「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」（創世記 2:24）とあって、神ご自身がアダムとエバの結婚の司式をして、ふたりを合わせられたかのように書かれています。おられるのです。その後、社会が乱れ、一夫多妻や離婚、また、同性婚などといったことが行われるようになりましたが、そうしたことは、神のみこころではないのです。

新約聖書では、創世記 2:24 の言葉は「奥義」であって、それは「キリストと教会とをさして言っている」

（エペソ 5:32）とあります。そこでは、キリストが教会のために自分の命を捧げたように、夫は妻を愛するようにと言われています。「キリストが私たちひとりびとりを救うために命を捧げられた。」これに勝る愛はどこにもありません。神は、この最も大きな愛、深い愛、貴い愛、そして変わらない愛を聖書の中に、また sacrament の中に示すだけでなく、信仰者の家庭の中にも示してくださっています。神は、家庭を、キリストの愛を学びとる場、また、それを表す場としてくださったのです。家庭は小さな教会であり、一家の主人はその祭司、夫婦

は祈りのパートナーであると言えます。家庭は信仰を伝え、育む場です。

しかし、残念なことに、ソロモンは信仰のパートナーとしての妻を持ちませんでした。信仰を伝え、養う家庭がなかったのです。そのためソロモンは、女性たちが持ち込んだ外国の神々に心を寄せ、エルサレムの東にある山の上に「高き所」と呼ばれる礼拝所を作り、彼女たちが神々に香を炊き、いけにえを捧げるのを許しました。その神々とは、シドン人の神アシュタロテ、アモン人の神ミルコム、モアブ人の神ケモシュなどで、どの神々も人間の子どもを生け贄に要求する神々で、そのようなことが実際に行われました。アモン人の神ミルコムは、モレクとも呼ばれ、これは、後に北王国で大きな勢力となるバアルの神のことです。南王国でも、ソロモンの子レハブアムの時代に、早くも偶像礼拝が広がり、女神アシェラの像などが立てられ、礼拝されていました。聖書は「彼らは、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の、すべての忌みきらうべきならわしをまねて行っていた」（列王記第一 14:27）と言っています。

主に選ばれ、主の民とされた人々、神の言葉を与えられ、神殿を持っていた人々が、主から離れていったのは、なぜでしょう。聖書は、ソロモンの子レハブアムについて「彼の母の名はナアマといい、アモン人であった」（同 14:31）と記しています。レハブアムは、アモン人の神、ミルコム、あるいはモレクを崇拝する母親によって育てられ、その心に真の神への信仰や愛、また畏

敬の思いを持つことがなかったのです。それはソロモンが父ダビデの信仰を引き継いだものの、それを子どもに伝えることができませんでした。信仰は受け取るだけでなく、誰かに伝えてこそ、それを全うできるのだと思います。最後まで保つことができなかったことから来ています。ソロモンの家庭の問題が国家に分裂をもたらし、混乱をもたらしたのです。

私たちは、ソロモンとは全く立場が違いますから、同じ誘惑を受けることはありませんが、しかし、事業で成功するためや自分の願いを達成したいため、夫や妻、また家庭を顧みないでしまうことがあるかもしれません。人は誰も、成功者になりたい、自己実現をしたいと願います。しかし、幸いな結婚や家庭なしには、ほんとうの意味では人生の成功者となることはできないと思います。信仰者の場合、豊かな晩年というものは、結婚や家庭が信仰によって築かれていてこそ、与えられるものだと思います。自分の人生を締めくくりをすることができるだけでなく、子どもたちや次の世代の人々に祝福を残していくことができるのだと思います。

三、天を目指して

学生に「何のために勉強するんですか」と聞くと、彼らは「いい仕事に就くためです」と答えるでしょう。

「では、何のためにいい仕事に就くのですか」と聞けば、「それは、よい生活ができるためです」と言うでしょう。「では、何のためによい生活を求めるのですか」と聞くと、「それは、幸せな人生を送るためです」

と答えるでしょう。では、ほんとうに幸せな人生とはどんな人生なのでしょう。そのためには、どうすればよいのでしょうか。ビジネス・ピープルの間で広く読まれた『七つの習慣』を書いたコーヴィー氏は、「人生を結末から見なさい」と言って、たんに事業に成功する、財産を築く、地位を得るといったゴールだけでなく、「自分の人生は良い人生だった」という満足を得ることができるようにしなさいと勧めています。

しかし、私たちが自分の人生を振り返って満足できるというのはどういうことでしょうか。健康が支えられ、必要なものが備えられ、さして大きな問題もなく日々を順調に過ごすということでしょうか。いいえ、それは、この世の旅を終えたのちに、天に行くことができるという確信のある人生です。人生を全体で考える時、私たちは、私たちのゴールが天にあることを考えずにはおれません。そして、そのゴールに至るためには信仰がなくてはならないことが分かります。聖書は「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」（伝道者の書 12:1）と教えています。若い時からしっかりとゴールを目指すことができたなら、どんなにいいことかと思いますが、若い時は目先のことしか見えなくて、ゴールを見失ってしまうことが多いものです。しかし、人生も半ばを過ぎたなら、私たちは、しっかりと目指すべきゴールを見つめ、最後まで信仰の競走を走り抜く決意を新しくしたいと思います。マラソンの走者が今までトップを走っていたのに、ゴール間近で棄権してしまったら、それまでの努力

が水の泡となってしまいます。それと同じように、もし途中で信仰を捨ててしまい、天にたどり着くことができなかつたら、それ以上に悲惨なことはありません。

日本語には「有終の美を飾る」という言葉があります。「最後までやり遂げ、その結果が素晴らしいこと」という意味です。この言葉は、中国最古の詩集「詩経」にある「初め有らざるなし、よく終わりあるはすくなし」という言葉から来ています。「始めるのは簡単だが、最後までやり遂げるのは難しい」という意味です。確かにその通りです。私もいくつかの習い事をしましたが、全部モノになりませんでした。習い事には、始めるにははじめても途中でやめてしまうことが多いものです。習い事なら、途中でやめてもさして問題はありませんが、信仰の場合はそういうわけにはいきません。信仰を最後まで守り通す。それは決して簡単なことではありません。バンヤンの『天路歷程』にあるように天に向かう道には「落胆の泥沼」「歓楽の山」「虚栄の市」「自惚れの町」などが待ち構えているからです。

ですから、ヘブル 12:1-2 はこう言って、私たちに天に向かう秘訣を教えています。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」信仰者のゴールは天です。そして、そこに至る

道を最後まで走り抜く秘訣は、私たちに信仰を与え、またそれを完成してくださるイエス・キリストを常に覚えていることです。イエスはスタートであり、ゴールですが、その途中も私たちと共にいてくださるお方です。目の不自由な人が競走をする時、その人といっしょに走る「伴走者」がつかます。イエス・キリストは、私たちの信仰の競走の「伴走者」でもあるのです。主と共に地上を歩む者は、主と共に天に至ることが約束されています。この幸いな約束を信じて、共に励まし合って、信仰の競走を最後まで走り抜きたいと思います。

(祈り)

私たちの父なる神さま。あなたは、私たちが満ち足りた人生を送ることができるため、あなたと、あなたの御子、イエス・キリストを信じる信仰を与えてくださいました。この信仰を最後まで保ち続け、絶えず主に信頼することができるよう助けてください。さまざまな誘惑によってあなたから離れそうになるとき、私たちが信仰の道へと引き戻してください。信仰の創始者であり、完成者であり、また伴走者であるイエス・キリストのお名前です。

あとがき

日本に最初に福音をもたらしたのは、フランシスコ・ザビエルで、それは1549年のことでした。福音は公卿や大名ばかりでなく、一般の民衆にも受け入れられ、多くのキリシタンが生まれました。1582年にはキリシタン大名の名代として4名の若者がローマ教皇に謁見するため、ローマに派遣されています。

彼らが帰国した1590年には秀吉が天下人となっていて、長崎で26聖人の殉教などがありました。キリシタンの数は増え、1600年、関ヶ原の戦いの頃、その数は40万人に達していたと言われています。

しかし、家康の時代にはキリシタン迫害が本格化し、江戸で宣教師が処刑され、踏絵が行われ、キリシタン禁書令が出されました。1637年の島原の乱の後、江戸幕府は鎖国体制に入り、それとともにキリシタンはさらに厳しく取り締まられるようになりました。

よく「キリスト教は日本人には向かない」と言われますが、それは権力者によって禁教政策が取られ、反キリスト教的な態度が植え付けられたためで、最初に福音に触れた日本人は、それを受け入れ、そのために命さえも投げ出すほどの堅い信仰を持ったのです。福音は、日本人を含め、あらゆる人を救う神の力です。私はそのことを確信して、アメリカにいる日本人に福音を語り続けたいと願っています。



Penguin Club
www.penguinclub.net